Library and Information Science No. 8 1970

文献への主題接近——その歴史的発展

The Development of Subject Access to Literature*

Ruth French Carnovsky
堀内郁子・亀岡裕子 訳
Tr. by Ikuko Horiuchi & Hiroko Kameoka

要　旨

文献を入手するのに，著者や書名から探すのでなく，その主題内容から探す方法を古くエジプト，バビロニヤの時代から現代までにわたって概観した。古代，中世，近世における主題接近の状況については，残された記録を丹念に調べて，どのように主題接近がはかられたかを示し，19世紀から今世紀はじめにかけては，C. A. Cutter やウィルソン社の貢献が著しかったこと，しかし現代では，件名標目の方式は精密さに欠けて不満足となり，ユニターム方式の出現や，索引法の研究が盛んになったこと，しかし，近頃の主題接近へのさしせまった要求に対して充分に答えられるきめてはまだみあたらず，今後に残された研究課題の重大さを示している。(訳　者)

主題の配列には，色々の方法が考えられる。たとえば本を書架上にグループ別にならべる場合があり，または，1つのリストにある順序に従って記録する場合，さらに，件名のアルファベット順とか，ある分類表の記号順にならべる場合などが考えられる。ここでは，主題をあらわす言葉による記入のみを扱うことにする。分類表や，特定の配列方法の他との比較などは扱わず，過去から現在までにあらわれた主題記入のパターンについて考察していこうと思う。まず，情報をその扱う主題によって求めることができるようになったのは，いつのことだろうか——という点から，始めることにする。

我々が手に入れうる最も初期の記録は，エジプト，バビロニアにまでさかのぼる。その当時からある種の配列が行なわれていたらしい。紀元前2000年頃のスメルの小さいタブレットは，最も初期の目録として一般に知られているが，それには，いかなる配列も識別できない49の著作のリストにつづいて，最後に，13の哲学に関する著作が明らかにグループとして集められている。[1]

いくらかの古代バビロニアの著作は，紀元前650年頃のアッシリアのもののみ現存しているが，シリーズナンバーをもち，[2] それらは，あきらかに主題によるシリーズで，たとえば，未来の予測に関するシリーズなどがみられる。これらのシリーズのうち，いくつかのリストが発見されており，多分，人々は，古代バビロンやニネベやニプルにある宮廷や寺院の図書館の指定された一画に行き，予言について書いたものや，政府の税金の記録，寺院の建造に関する文書などが，集められているのを見ることができたであろうと推測される。

ある種の配列が行なわれていたという別の証拠は，一挙に破壊されたと思われるタブレットの遺跡にも現われ

* This is a translation of the paper by Dr. Ruth French Carnovsky, Dean of the Graduate Library School, University of Chicago, presented as a public lecture in Los Angeles on May 8, 1969, in a series on cataloging and classification sponsored by the UCLA Graduate School of Library Service in honor of Professor Emeritus Seymour Lubetzky. The original paper was published by the UCLA Graduate School of Library Service in 1969. The permission of the translation has been given by the author as well as Dean Andrew H. Horn of the UCLA Graduate School of Library Service. (*Ed.*)

ており，あるものは1つのシリーズの1部分であったり，他は，全体が商業の記録から成り立っているもののようである。

ニネベのものでは，紀元前650年頃のタブレットが少数発見されており，それらは王立図書館にあった著作のリストである。これらのリストは，前述のものより1500年ほど後のものであるにもかかわらず，本質的には，前のものと同じ主題接近の方法がとられている。特定の主題名をつけてあるのではないが，書名をグループ別にしてあるのは，ある程度の主題配列のなされていた証拠といえる。

同じ事が，古代エジプトの図書館にもいいうる。あの有名なエジプトの寺院の壁にほられている目録には，寺院の管理についてや，太陽と月の位置についての著作，さらに，木にほられた著作のリストがみられ，これらはおそらく，初めて，形式標目を使用したものであろう。

ギリシャとなると，もっと古い時代より少ししか，情報を見出せないようである。紀元前250年頃に生きていた，Callimachusがいくつかの本のリストを作った人として，後世の著者に引用されているが，我々は少くともそれらのうちあるものは，主題によって分類されていたことを推測することができる。なぜならば，ギリシャの文法学者 Athenæus は，パンの作り方に関して，Callimachus[3] の本のリストを参照しているからである。

当時のギリシャが主題による探し方に関心が高かったことを暗示しているもう1つの記録がある。それは，第1世紀の歴史家 Strabo が，アリストテレスが，エジプトの王立図書館の配列のために，エジプトによばれたことをのべているからである。[4] もちろん，現在では，Strabo のいっていることが正確かどうか疑わしいが，ここで重要なことは，アリストテレスがエジプトに旅をしたか，どうかということではなくて，その時代に本を計画的に配列しようという考えがあったということなのである。

他に，古代ギリシャにおいて，主題の分類が行なわれていたことを示しているのは，Strabo におくれること1世紀頃，ロード (Rhodes)[5] で発見されたギリシャの目録の断片のみである。そこにリストされている全ての著作は，哲学に関するものだけで，現在，我々が種々の主題について書いていることを知っている著者についても，彼らの哲学学的著作のみあげているのが最も有効な証拠である。

その頃のローマに関しては，ギリシャよりさらに，わずかしかわかっていない。ただ我々は，ローマの図書館が，ある種の固定した本の所在位置をきめていたことがわかる。なぜなら，後のローマの作者が，ある本について，それがウルピア (Ulpian)[6] 図書館の第6番目のケースの中にあるとのべているからである。そしてまた，我々は，考古学者の発見から，ローマの図書館は，ギリシャの本をラテンの本とわけて配架し，時には異なった建物にそれらを収容していたことさえ知ることができる。[7]

紀元初期の頃の事情を知る手がかりは，全く乏しいが，古い時代には，主題接近の必要性がほとんど，感じられていなかったことは十分推測される。そして次の主題接近への関心の例をみるためには，500年も飛躍しなければならず，その時代には，いくつかの僧院にある少数の写本が唯一のコレクションであった。

6世紀の Caasiodorus は，図書館の配列に関心をもっていた人として，注目すべき人物である。[8] 事実，彼はその時代の他のコレクションより大きくて，秩序だった自分自身の図書館を持っていた。彼は，まず本を，世俗的な著作と神聖な著作とに分け，そのあと，主題別のラベルをつけた本をケースに配列した。これらの主題は，もちろん「神学」「文法」「幾何学」という程度の大まかなものであった。彼は，目録や索引は作らなかったが，ある特定の著作を論ずる時には，その主題に関する本が配架されている番号のついたケースを指し示したのであろう。

実際上，それ以後数世紀にわたって Cassiodorus のものより良い主題接近は生み出されなかった。アッシリア時代から第9世紀までの間には，どのような本のリストも現存していないというのは，まぎれもない事実である。それにひきかえ，9世紀にはドイツのライヘナウ (Reichenau)[9] にあるもの，フランス，聖リクイェール (St. Riquier)[10] のベネディクト教団の目録，聖ガレン (St. Gall)[11] のもの等々有名な目録が出ている。

これらのうちで最も古いライヘナウのものは，「旧約聖書の本」「説教」「辞書」というような二・三の標目をもつあらい分類配列がしてあり，さらに，厳密には主題配列ではないが，1人の著者のすべての著作はその主題にかかわらず，一ケ所に集めている。多分この目録は，この時代の他のどの目録よりも主題分類の仕方をよく示していると思われる。

9世紀以後の目録は，きわだっては変化がない様であ

る。そして確かに以後数世紀にわたって，進歩のあとがみられない。

1162年にできたイギリス，ダーハム大聖堂にあるリスト[12]は，いくつかの標目の下に配列されているが，それらの標目はごく一般的で，9世紀のものに比べても，数量的にも多くない。ダーハムの目録で，唯一の新しい標目は“Libri Anglici”のみである。

この時代以後，中世を通じて，ゆっくりと徐々に，より多くの写本が写され，より多くの著作が書かれるにつれて，教会や僧院の図書館の目録も数において特に，規模において大きくなっていった。

14世紀までには，蔵書が大きくなってきたので，目録も目立って長くなった。目録の長さが，長くなるにつれて，標目の数もましたにもかかわらず，主題を統制することは，質的には，変らなかった。資料をその主題によってその所在を探すということに関しては，何ら改良されず，せいぜい，標目は，どのケースにその本が配架されているかを読者に示したにすきず，ほとんどの場合，リストは，蔵書点検のためか，寄贈者の名前を記録しておくためか，ただ単に，1人の著者の著作をリストしたものにすぎなかった。さらに，著作のうちのかなりの数は全く記入がなされなかった。なぜなら，僧院においては，一般に何冊かの著作が一緒に合冊され，各冊の最初の著作しか，リストされなかったからである。

大学の図書館は，13世紀と14世紀の間に，はじめられた。しかしそれらの蔵書数は，非常に少なく，当然，件名標目も大まかなものであった。トリニティー・カレッジ (Trinity College) では，その1394年の目録で，「民法」「教会法」「神学」の3つの件名標目しか使っていないし，1418年に作られた，ピーターハウス (Peter house)[13]の目録では，380冊の蔵書に対して，17の標目を使用している。[14] 同じ状態が，以後何年間かの目録においても続いている。

今だに続いている目録と索引の不幸な分裂は，すでに8世紀の聖書についての著作の索引からあらわれはじめ，14世紀に，はじめてできた個々の出版物に対する索引[14]などにも，それがみられる。少なくとも14世紀，15世紀には，目録で主題を探すことはあたりまえであったから，大して重要でないと思われていたが，その時代に書名の中からとった主題をあらわす言葉で作った，アルファベット順の件名索引の少数の例があり，これらは，かなり精密な主題に到達することができた。このことは，Dioscorides の“De materia medica”の索引にみることができる。

初めての大規模な主題コントロールが，1548年の Conrad Gesner の“Pandectarum”(目録) にみられる。この索引には，“rain”とか“sleep”にあたることばや，種々の宝石の名前などかなり特殊な件外が記入されている。しかしながらその記入のいくらかは，単なる語彙表にすきず，書誌的な参照に欠けていることに注意すべきである。主題接近に関する限り，目録は実に長い間，変化がなかった。

1560年，Florian Trefler はアウグスブルグ (Augsburg) において，図書館管理に関する論文を出版した。[16] そして彼が，図書の主題接近を，真剣に考えた最初の図書館員ということができよう。彼はその時代としては大変ですんだ分類表と，請求番号を創案した。彼は，書架目録，本の内容を表わす分類索引そして，分類索引に対するアルファベット順の索引などを含む5部より成る目録を提唱したのである。

1595年には，ロンドンの本屋，Andrew Marusell が，彼の目録の序の部分にこうつけ加えている。無著者名図書の記入に関して，〝私は，それらをその名づけられている書名か，または，それらが，とり扱っている事柄か，時には，その両方の下に記入した。なぜなら，そうする事が，無著者名図書をみつけるのに，最も簡単な方法だと思ったからである。〟[17] 彼の主題に関する考えは，彼の目録の中には，実際にはあまり実現されていないが，しかし，その時代には，目立って進んだ考え方であった。

同じ頃のストラスブール (Strasbourg) においても，我々は Israel Spach の著作の中に進歩した主題コントロールのもう1つの例をみることができる。[19] 彼が1598年に書いた哲学と言語学の書誌は，分類順に並べられたおよそ400の件名の下に，4000の著者記入が記されており，更に我々の関心をひくことは，彼のつけ加えたアルファベット順の件名索引でそれらは，“Genoa”“Geometry”“Gladiatorial combat”“Globes”“Glory”というような，精密な標目を含んでいることである。

同じ16世紀には，いくつかの伝記百科辞典の索引が編纂され，それらは，“Philosophers”“Sacred poets”“Church historians”というような，標目が使われていた。[19] 確かに，16世紀は，分類された主題書誌がさかんに出された時代であったようだ。しかし，それらのうち，Spach のように，アルファベット順の件名索引がつ

いたものは稀であった。

一方17世紀になると，アルファベット順に配列された主題書誌が多くなった。早いものとしては，ルーヴァン (Louvain) の Molanus[20] の編纂したものがあり，"Salt tax" "Sword" といった，かなりくわしい標目が使われ，各々の標目の下には，3つから4つの著作がリストされていた。

もう1つこの時代に同じような索引が出ている。それは，1612年に出た Fabianus Justinianus[21] のもので，そもそもは，ヴァリセリアナ図書館の目録であった。それは Molanus のと大同小異で，やはり，"Aaron" "abdomen" "Abel" "ablutio" "Abraham" といったこまかい標目が使われている。

ボードリイ (Bodleian) の目録は，この時代に出版を開始した。[22] 最初の版は，神学，医学，法律，芸術の4つの学部に基づいた4つの主題分野に分けられたが，あとの目録は無著者名作品を書名の要語からリストした以外は，主題記入はなく，単なるアルファベット順のリストであった。それらはもちろん図書館の目録であり，これまでの伝統に忠実に，主題のコントロールはなく，せいぜい良いものでも，現代の索引や書誌に比べると，不明瞭なものであった。

しかしながら，ボードリイの最初の図書館員である Thomas James は図書館を引退したあと，神学，医学，及び法律の件名目録を編纂し，かなり精密な件名をアルファベット順に配列してつけた。後になって彼はさらに，文芸科の学生のために，より広い学問分野をカバーした件名目録を作った。この目録では，ある細目は，論理的に配列されているが，他は，アルファベット順に配列されているといったふうで，その主題配列は，かなりでたらめである。記入のうちのいくつかは，本当の意味の件名であるが，他は書名からとった言葉を使用したりしている。

この時代のもう1人の図書館員，Adrien Baillet は，有名なフランスの法律家，Lamoignon のコレクションのために目録を編纂するにあたり，そのまえがきでアルファベット順の索引の作り方について一連の指示を書いている。[23] 彼の原則は，17世紀の終りにしては，大変新しいものである。彼は主題分析の必要性をのべ，記入に際しては，同義語の中から1つの形式を選ぶべきであり，異なったスペリングや異国語の用語などで，記入に使用されなかった形式から参照を作るべきであることを明記している。ただし，彼の目録は出版されなかったし，現存しないので，我々は，彼がどこまで彼自身のいったことを実行にうつしたかは，わからない。

確かに16世紀は，いくらかのかなり立派な目録や書誌や，また目録について積極的な考えをもつ人を生み出したといえるが，主題接近については，意義ある発展は，みられなかった。件名目録についてのべている人は，上にあげた人々の他に，John Dury[24], Gabriel Naudé[25], Frederic Rostgaard[26] などの名をあげることができるが，彼らは，いずれも主題のとり扱いに関して新しい，独自のものを考え出したわけではなかった。

ただ1つ，革新的なものが，あらわれたことを記しておかねばならない。それは，アムステルダムの Cornelius à Beughem[27] による定期刊行物の件名索引である。彼は図書と，報告書の書評を索引したにすぎなかったが，1世紀後の1776年，Daehnert がグレイフスワルド (Greifswald)[28] 大学で目録を作った時，その件名索引の中にいくらかの雑誌の論文を含めたこと，さらに，1790年に，ドイツの定期刊行物の索引ができたこと[29] 以外は，他に例をみないほど，先駆者的できごとであった。しかし，これらのうちいずれもが，継続的出版物にはならなかった。

アメリカにおいて，最初の件名目録があらわれたのは，18世紀である。それらのうちで最良の目録は，多分，イェール大学の総長になった Thomas Clap が1743年に編纂したものであろう。[30] Clap の目録は，学生がその学識として必要だと彼が考えた順序に従がって，28の大きな項目の下に配列されていて，その時代の典型的な目録に比べると，多くの細目が使われ（数学の下には8つ，歴史の下には 13，神学の下にはもっと多くの），さらに分出記入さえもあった。50年後の1790年に出たハーバードの目録は，60の主題がアルファベット順に並んでいたが，細目はなかった。

18世紀の終りまで，いや19世紀に入っても，最初の20年間には，質的には主題接近に関して，意義ある発展はなかった。しかし，やがて改善のわずかなきざしがみえ始めた。

1819年から1824年に出た Robert Watt の Bibliotheca Britannica の主題接近はその時代のものとしては，著しい精密さをもっていた。典型的なものとして，"idleness" "idler" "idol" "idolater" "idolatry" といった標目をあげることができる。件名を，書名の中に出てくる言葉に限定したためにこのような，同じ言葉の語尾を変化させた形の標目が，くり返しでてきて，それぞれ独立の

記入として使用された。書名がたまたま外国語で，その言葉が，翻訳されたものの時のみ書名以外から標目がとられたが，その例はわずかしかない。しかも，書名中の言葉は，その意味を考慮せずに使っているということはない。例えば，ほかの索引では，時に，こういうことが起っているのであるが，mint plant（訳注：植物の薄荷と造幣局と2つの意味がある）に関する著作は，coin（貨幣）と同じ所にはくりこまれていない。

1825年，T. H. Horne[31]は，大英博物館の分類表を発表し，主題接近の改善に対する関心を示し，〝分類目録においては，2つないし，3つの標目で探される可能性のある本はすべて，その必要な各々の標目の下に記入されるべきである〟とのべている。

25年後，もう1人，目録における主題接近について，はっきりした意見をのべた人があった。それは Panizzi で，彼は大英博物館の審問会での質問に，このような答をしている。〝本の書名が，その本の持つ内容をうまくあらわしている限り，主題の索引が，存在すべきである。もちろん，書名がよければ，その索引もよくなり，書名が完全であればあるほど，その索引も完全なものとなる〟。[32]

1856年，イタリアからきたもう1人のイギリスの図書館員，Andrea Crestadoro[33]は主題をあらわす言葉は，書名からとるべきであるとのべ，マンチェスター公共図書館の目録など，いくつかの目録の中で，その原則を実行にうつした。

19世紀後半における，主な主題別リストに，有名な Brunet の書誌の索引がある。[34] これは，細目つきの大まかな，標目によって分類されている。例えば，“Aats”という標目の下にでてくる2，3の細目には，次のようなものがある。“Calligraphy”“Typogaphy”“Iconogrophy”“Photography”“Painting”など。Brunet の索引は，Watt のほど，細かいアプローチがなされていないが，その標目は，書名の中にでてくる言葉に，それほど依存していない。19世紀のアメリカにおいて，有力な図書館員は，Charles Jewett で，彼は，目録法，特に主題の取扱いにおける先駆者ということができる。1843年，彼は，ブラウン大学の図書館目録を作った。これは著者名目録だったが，この中で彼は，無著者名著作を書名中の最も重要な言葉の下，または，それが関係のある主題のもとに記入している。[34] さらに，彼はその著者名目録に，件名索引をつけ，できる限り，分類索引にアルファベット順索引をつけるという目的にそうような方法で配列しようと努力している。[36] しかし，彼がいかにしてこの索引を作ったか，また，標目を決定する際の根拠は，何であったかなど，くわしい事情を述べていないし，その目録からもそれをうかがいしることができない。例えば，“Stenography”という標目の下には，2冊の本がリストされており，この2冊とも書名中には“Stenography”という言葉は含まれていなくて，“Shorthand”という言葉が使われている。

一方，“Shorthand”という標目の下には，これらのうち1冊だけがリストされており，利用者には“Stenography”という標目を，参照するよう指示してある。

定期刊行物の件名索引は，図書館の件名目録にくらべると，かなり発達がおくれた。今までにものべてきたように，2，3のこころみは18世紀にもなされたが，19世紀になると，新たな進展がみられる。その1つは，ゲッチンゲンの J. D. Reuss[37]が，学会の出版物の件名索引の出版をはじめたことである。彼は，大まかな標目に，多数の細目をつけた，分類順の配列を使用した。例えば，“Paintings”という標目の下には，“Light”“Color”“Conservation of Paintings”といった細目があり，これらは，全く書名からとった言葉ではない。これは，かなり精密な主題接近であったが，全索引が分類順だったので，手早く探すことは不可能であった。ただ，各巻のはじめに細目の標目も含めたすべての主題のリストがあったので，これが，検索の助けになった。

アメリカでは，19世紀のなかばになってようやく Poole の索引[38]が初めてあらわれ，定期刊行物の索引が，我々の書誌的資料の重要かつ，永久的な役割を占めるようになった。Poole の主題語の選び方は，かなり略式で，彼の標目に対する考え方や，いかに標目を選ぶかは，この索引が，いくつかの図書館の共同の事業となった時，彼が参加図書館に示した指示の中にあらわれている。すなわち〝ほとんどの場合，著者自身がつけた書名は，最もよくその著作の主題をあらわしている。しかし，もし，著者のつけた書名が，あいまいだったり，奇をてらっていたりしたものであった場合は，索引者が，より良いと思うものをつけた方がよいし，著作は，それが当然属すべき標目の下におかれるべきである。つまらない，筋道のたたない事柄への参照は，さけねばならない〟[39]とのべている。

1885年にでた，“Cooperative Index to Periodicals”はその〝読者への注意〟の中で，これが件名索引であり，書名でなくその本の取り扱っている主題の下を探すよう

にと注意している。[40] しかしながら，実際にはすべての主題語は，書名中の言葉からとられていて，"Recent American Fiction" という書名の本は，"American fiction, Recent" という標目の下に，"Physical training at Amherst College" という題の本は，"Amherst College, Physical training at" という標目の下に記入されているという具合であった。

19世紀最後の25年間には，主題接近への関心が非常にたかまった。1874年，イギリスにおいては，Stanley Jevons[41] がその自然科学に関する著作の中で，面白い予測を行なっている。彼はいう，〝自然科学の分野への我々の視野がひろがり，政府や他の公共機関が，今までほとんどその調査に目をむけなかった大量の歴史的，科学的情報を組織的に目録し，索引する時代がやがて来るであろう〟と。ちょうどこの頃，ロンドンで Indexing Society[42] が設立された。

この時代に，アメリカでもいくつかの優れた目録が出され，それらすべてが主題を考慮したものであった。最も古いのは，ピーボディー インスティテュートの図書館目録で，その1883年版の前がきで編者はこうのべている。〝この目録が，1869年に初めて出た時には，ボストン公共図書館の Jewett の目録と Panizzi の大英博物館の目録規則が，我々が得られる，唯一の役に立つ手引であった。これらで解決できない，すべての問題は，我々自身で解いていかねばならなかった。この目録の構造は，唯1組のアルファベット順に配列した目録で，著者名のわかっている本はすべて，著者名，書名，件名の下に3回記入される。

しかし，その目録を見ると，この計画が完全に実現されているとは思われない。リストされている多くの主題は，本当の意味の件名で，書名の中の言葉に頼っていないが，一方では，書名が件名とはっきり違った場合でも，書名記入が加えられている場合は，ほとんどない。

1874年，ボストンのアセニアム (Athenæum) の有名な目録の第1巻が出版され，その時以来，Charles Cutter が主題接近の問題に傑出した人物として，登場した。Cutter がひきつぐ前までのアセニアムの目録は，特にその件名が書名の用語からとられた要語記入であったために，彼には，受け入れがたいものであった。彼はこれを，本当の件名に変えることが，重要であると考え，6,000以上の件名をかえる作業にとりかかった。[43]

1876年，有名な米国公共図書館の報告[44] が出され，その目録部門は，Cutter が執筆者であったが，彼はその中で，すべての目録は，それが辞書体目録であれ，目録の件名索引であれ，分割の主題目録であれ，何らかの方法で，主題接近が，なされねばならないと，確信した。当時はこれは，一般的に受け入れられる仮定ではなかったし，主題記入はどうあるべきかという彼の考えも定まってないかった。件名に書名の用語を使うことは，旧式であると考え，1869年に，ある図書館員が，自分の目録について〝図書は，著者名と書名のもとに記入し，その書名が主題にふさわしい時にのみ，主題のもとに記入する〟[45] と述べているのに対し，不満の意を表わした。Cutter は，書名の用語は，英語で書かれた作品についてのみ使いうることを指摘し，外国語の本は，実際問題として，主題を示すのに書名の言葉を使わないための手段になりうるとまでいっている。[46] 彼はその著書 *Rules for a printed dictionary catalogue* で，〝目録は，必然的に図書の書名のみに限るべきであるという誤まった考え方がおきてきたのは，不思議である。もし，そうだとしたら，その書名が，主題について言及していなかったり，または，あいまいだったり，不完全にしか主題をあらわしていない非常に多くの図書が，記入できなくなってしまう〟と云っている。[47] Cutter は，不十分な書名をもつ本のみでなく，すべての本に件名を与えようとした最初の人であったであろうし，彼はまた，件名の工夫，処理の方法を公式化しようとした最初の人でもあった。我々は，彼が，主題，場所，事柄，国のどれを標目の記入にすべきか，また，複合標目の転置は，どうすべきかなど，我々にもなじみの深い問題に，頭をなやましていたのがわかる。Cutter が，1つの解決から他の解決へと考えがぐらついたことについて，Ranganathan は，〝彼が正常な状態にいなかった〟として，Cutter を非難した。[48] 確かに，Cutter は，他の問題では果断な人であったが，標目の精密さとか，転置とか，地名の下の記入とかいった問題は，ついに，解決しなかたというのは正しい。

1895年，ALA の最初の件名標目表は Cutter の原則に基づいて作られ，事実，表の付録として出された。件名目録に対する Cutter の影響力はその時以来，さまたげられることなく，ひき続いている。

1912年に，第3版であり，最後の版である ALA の件名標目表が出た時，その編者であった Mary Josephine Briggs は，その年の ALA 会議で，これに対する報告を次のようにのべている。

〝形容詞は，どれを選ぶか，転置はどうするか，細目

の名詞はどうするかなどの原則を公式化することに特別の努力がはらわれた。この種の標目のための厳密な規則は，カタローガーにとっては，恩恵になっても，目録の利用者には，ちっともありがたくないであろう。1つの形の標目を採用して，他の標目を使わないというのは，不合理なことになる。"[49]

20世紀初頭，アメリカ書誌界には，2つの重要な件名索引の伝統が現れた。第一は，Poole の索引で，これは書名の用語を強調したものであり，第二は，Cutter の方式でこれが，一般にいう件名を使ったものであった。後者は主として，米国図書館協会と，米国議会図書館の件名表を通じて，ほとんど世界中の図書館に採用されるようになった。その当時，いや現在でも，なぜこれらの伝統のうち，一方は冊子体索引で生かされ，一方は図書館の目録で生かされたか，疑問に思うかもしれない。多分，H. W. Wilson の索引だけが，この仮定をうち破った。しかし，それらは，1898年まで，Cutter の原則を受けついできた図書館員によって編纂されてきたものである。いくらかの書名中の要語が，使われたが，Poole の索引とは異なり，それらは，書名とみなされ，主題記入ではなかった。

Readers Guide の最初の累積版（1905年に出た）の前がきには，こう書かれている。「論文は，しばしば人をあやまらせるような書名によって示される標目でなく，実際に取扱っている主題を表す件名の下に索引されている。」

初期の Wilson の索引作成者は，彼らが標目の選択と形式に関してもっていたむづかしい問題についてのべている。彼らが手に入れられた手引としては，最初の ALA の簡単なリストと，ピーボディーとアセニアムの目録ぐらいで，それらは必らずしも一致するものでなく，例えば，ピーボディーの目録は，"Child labor" というような直接的な標目が多く，アセニアムの標目は，細目をつけて "Children-Employment" というようになっていた。Wilson の索引作成者たちは，しばしば標目を決定するのに百科辞典にたよったり，ミネソタ大学の専門家に相談したりしたといっている。[50] 後には，その Wilson の索引自体が，標目の最良の拠りどころとなったのである。

その頃には，主題接近の発展もその頂点に達し，件目目録のための規則を作り，標目表を出版しようとする試みが，なされるようになり，図書館員や書誌作成者は，標目の特殊性や，幅の問題にまっしぐらにつき進んでいった。Cutter は，その問題にとりくみ，彼の規則の多くの条項が，その問題に対する指示を与えている。[51] 彼は本の主題を含む分類上の綱目の下に記入するのでなく，その主題そのものの下に記入するという特殊な記入方法を指示し，また，いくつかの主題を扱っている著作は，その各々の主題の下に記入すべきであるとした。しかし次の規則をみると，このような一見簡単な指示のもとに横たわる複雑さに我々は，すぐ気がつく。すなわち，もし，本がいくつかの主題を扱っていて，それらの主題を一緒にまとめるともっと大きい一つの主題となる場合は，その大きい主題の所に記入してよいという規則である。そして，この指示に従がうと，我々は，たちまち特殊性の問題に直面しなければならない。100年後の今日でも，今だに我々が，かかえている問題である。事実，その問題は，Cutter の時代よりさらに，大きくなってきている。

今世紀においては，その困難さは，特に激しい。一方では，出版物の量が想像以上に増加し，他方，職業や教育は，ますます専門化してきている。これらの要素がからみあって，どんどん増えていく資料の中から適切なものを迅速にふるいわける方法を早くみつけることを，要求される。専門図書館が発達し，索引や抄録サービスが盛んになってきたし，また，あらゆる面で，ますます専門的な情報に対する要求が，強くなった。さらに "専門的 (specific)" という言葉は，何を意味するかという問題は，引きつづき，我々をなやましている。

今世紀の初めには，図書館目録から全くはなれた，冊子体の雑誌記事索引というものが確立された。これらの雑誌記事索引は，当初から図書館の目録にくらべると，より精密な標目が，使われる傾向があった。その理由は，図書館目録には，すでに公式化した標目の伝統があったが，一方索引は，独立して作られそれを編纂する人は，図書館の規則に拘束されなかったからではなかろうか。さらに，索引は，図書館の目録よりおくれてあらわれ，それができた時には，より専門的な言葉を使う必要性が増大していたためであろうと思われる。目録の機械化が，次第にこの考えを変えつつあるとはいえ，今日でも，索引というものは，目録とはちがうものであると考えられている。

今日，主題接近に対する関心が，非常に高まっている。だれも，現在使われている件名標目の方式に満足していない。それらは精密さに欠け，その用語は，関連性がなく，あまりにも固定化し，形式化している。情報の

探索，組織にたずさわっている人々は，図書館員も含めて，主題接近とは，図書館目録，索引，または，主題書誌の形式をとる一つのプロセスとして考えはじめている。この考え方が，記入の原則の再評価をもたらしつつあり，かつては退けられていた書名中の言葉の索引語への使用が，件名の形式的な表からよりも，目次や本文からとられた言葉と同様に，索引に使われることが，再び考えはじめられている。この動きは，多分ユニターム方式が紹介された頃から始められたか，少くとも，その頃から関心が高まった。しかし，その動きの前兆は，ある種の典拠リストが使用された頃からあった。1世紀前，主要語による件名記入に関してあったと同じような困難が，ユニターム方式の中にもみとめられるが，それは，結局，統制されていない同義語の問題である。

最近10年間，索引法や索引理論への関心が，非常に活発で，この方面の研究がますます増えている。多くの研究が，機能という観点から，最も満足すべき方式をさがし出す目的でなされている。索引語は，書名や，副書名，または目次，本文の中からとられるのが良いのか，それとも，本当の件名標目が使われるべきなのか，ある研究は，標目と文章構造論との関係をしらべ，また，あるものは検索のために用語の特殊性の種々のレベルの有用性を計量しようと試みている。さらに，あるものは，典拠リストに関心をもち，いかにそれらが役に立つか，また，どの種類が，最もその目的に役立つかしらべている。

これら現在行なわれている研究をしらべることによって，主題接近に関する今日の関心の方向をしることができる。見方によっては，現在は，一時代前とはちがっている。すなわち，現在，我々の主題接近についての関心は最も重要なさしせまったものとなっている。しかし，別の見方をすれば，何も，変化していないともいえる。主として，特性の機能的定義と，記入語の効果的なよりどころの発見という，同じ問題が，今だに答えられていない。

「困難と議論」を伴なった「目録の黄金時代」は終った。なぜなら，図書館は今後，目録カードを，議会図書館に依存するからである″ という Cutter の予言は，特に主題接近に関する限り，正当化されない。

Cutter は，すべての問題が解決したと仮定して，主題目録は，「もう1つの失なわれた技術」であると特徴づけたが，そうでなくて，主題目録の黄金時代は，むしろまだ未来にあるのである。

（著者　シカゴ大学：訳者　図書館・情報学科）

1) Kramer, S. N. *From the tablets of Sumer*. Indian Hills, Colorado, Falcon's Wing Press, 1956, p. 254–8.
2) British Museum. Dept. of Egyptian and Assyrian Antiquities. *Catalogue of the Cuneiform tablets in the Kouyunjik Collection*. London, 1889–1914. Vol. 5, p. xxix.
3) In his Deipnosophists XIV, 643 e.
4) Geography of Strabo, XIII, I, 54.
5) Powell, J. U. and E. A. Barber. *New chapters in the histroy of Greek literature*. p. 83 ff.
6) Vospiscus. *Tacitus* 8. I.
7) Clark, John Willis, *The care of books*. p. 12 ff.
8) His *Institutiones* I, 8, 17; 11.
9) Reichenau 822, printed in Gustave Becker, *Catalogi bibliothecarum antiqui*. (Bonn, Max. Cohen, 1885. p. 4 ff.)
10) *Ibid*., p. 24 ff.
11) *Ibid*., p. 32 ff.
12) *Ibid*., p. 239 ff.
13) Norris, Dorothy May. *A history of cataloguing and cataloguing methods* 1100–1850. London, Grafton, 1939. p. 65 ff.
14) *Ibid*., p. 87 ff.
15) Witty, Francis J. "Early indexing techniques," *Library quarterly*, vol. 35, July 1965, p. 4 ff.
16) Trefler, Florian. *Methodus exhibens per varios indices, et classes subinde, quorumlibet librorum, cuiuslibet bibliothecae, breve, facilem, imitabilem ordinationem*. Augsburg, Phillippum Ulhardum, 1560.
17) Maunsell, Andrew. *The first of the catalogue of English printed books*. London, 1595. p. 1.
18) His *Nomenclator scriptorum philosophicorum atque philologicorum*. Described in Besterman's *Beginnings of Systematic Bibliography*. (London, Oxford Univ. Press, 1935. p. 32.)
19) As in Cardinal Robert Bellarmine's *De Scriptoribus Ecclesiasticis*, described in Archer Taylor's *General subject indexes since* 1548. (Philadelphia, Univ. of Pennsylvania Press, 1966) p. 84.
20) His *Bibliotheca Materiarum*, described in Taylor, *op.cit*., p. 94 ff.
21) His *Index Universalis Alphabeticus*, described in Taylor, *op cit*., p. 112 ff.
22) Wheeler, G. W. *The earliest catalogues of the Bodleian Library*. Oxford, Univ. Press, 1928, p. 13 ff.
23) Verner, Mathilde. "Adrien Baillet (1649–1706) and his rules for an alphabetic subject catalog," *Library quarterly*, vol. 38, July 1968, p. 217 ff.

24) His *The reformed librarie-keeper* ("Literature of libraries in the seventeenth and eighteenth centuries," vol. II. Chicago, McClurg, 1906)
25) His *Avis pour dresser une bibliothèque* (Leipzig, 1963)
26) His *Projet d'une nouvelle methode pour dresser le catalogue d'une bibliothèque*. 2 d ed. Paris, 1968.
27) His *La France Sçavante* (Amsterdam, 1683) and his *Apparatus and historiam litterarium novissiman* (1689) described in Archer Taylor, *op. cit.*, p, 179 ff.
28) Taylor, *op. cit.*, p. 204 ff.
29) *Allgemeines Sachregister ueber die wichtigsten deutschen Zeit- und Wochenschriften*, described in Taylor, *op. cit.*, p. 208.
30) *Catalogue of the Libray of Yale College in New Haven*, New London, T. Green, 1743.
31) Horne, T. Hartwell. *Outlines for the classification of a library submitted to the Trustees of the British Museum*, London, G. Woodfall, 1825. Quoted by Norris, *op. cit.*, p. 202,
32) Great Britain. Parliament, House of Commons. *Report of the Commissioners appointed to inquire into the constitution and government of the British Museum*. London, 1850, ques. 9890.
33) His *The art of making catalogues of libraries* (1856).
34) Brunet, J. C. *Manuel du libraire et de l'amateur de livres*. 5 th ed. Vol. 6. Paris, 1860-65.
35) *A catalogue of the library of Brown University*. Providence, 1843, p. xix.
36) *Op. cit.*, p. xx.
37) His *Repertorium commentationem a societatibus litterariis editarum*. 16 vols. (Göttingae, 1801-21).
38) Poole, W. F. *An alphabetical index to subjects, treated in the reviews and other periodicals*. New York, 1848.
39) Poole, W. F. *Index to periodical literature*. New York, 1882, pp. vii-viii.
40) Fletcher, W. I., ed. *The cooperative index to periodicals for* 1885. New York, 1886, p. iii.
41) Jevons, W. S. *The principles of science*. 2 ed. London, Macmillan, 1877. p. 718.
42) Wheatley, H. B. *How to make an index*. London, Elliot Stock, 1902. p. 210.
43) Ranz, Jim. *The printed book catalogue in American libraries*: 1723-1900. Chicago, ALA, 1964. p. 73 f.
44) U. S. Bureau of Education, *Public libraries in the U. S.* Washington, 1876. Special report, Part I: "Library catalogues" by C. A. Cutter. p. 526 ff.
45) *Op. cit.*, p. 534.
46) *Ibid.*
47) *Op. cit.*, Pt. II, p. 41.
48) His *Theory of Library catalogue*. London, E. Goldston, 1938. p. 94.
49) Briggs, M. J. "The A. L. A. list of subject headings," *Bulletin of the American Library Association*, vol. 1, July 1912. p. 227 ff.
50) Lawler, J. *The H. W. Wilson Company* Minneapolis, Univ. of Minnesota Press, 1950. p. 101.